

旭川支部活動状況報告

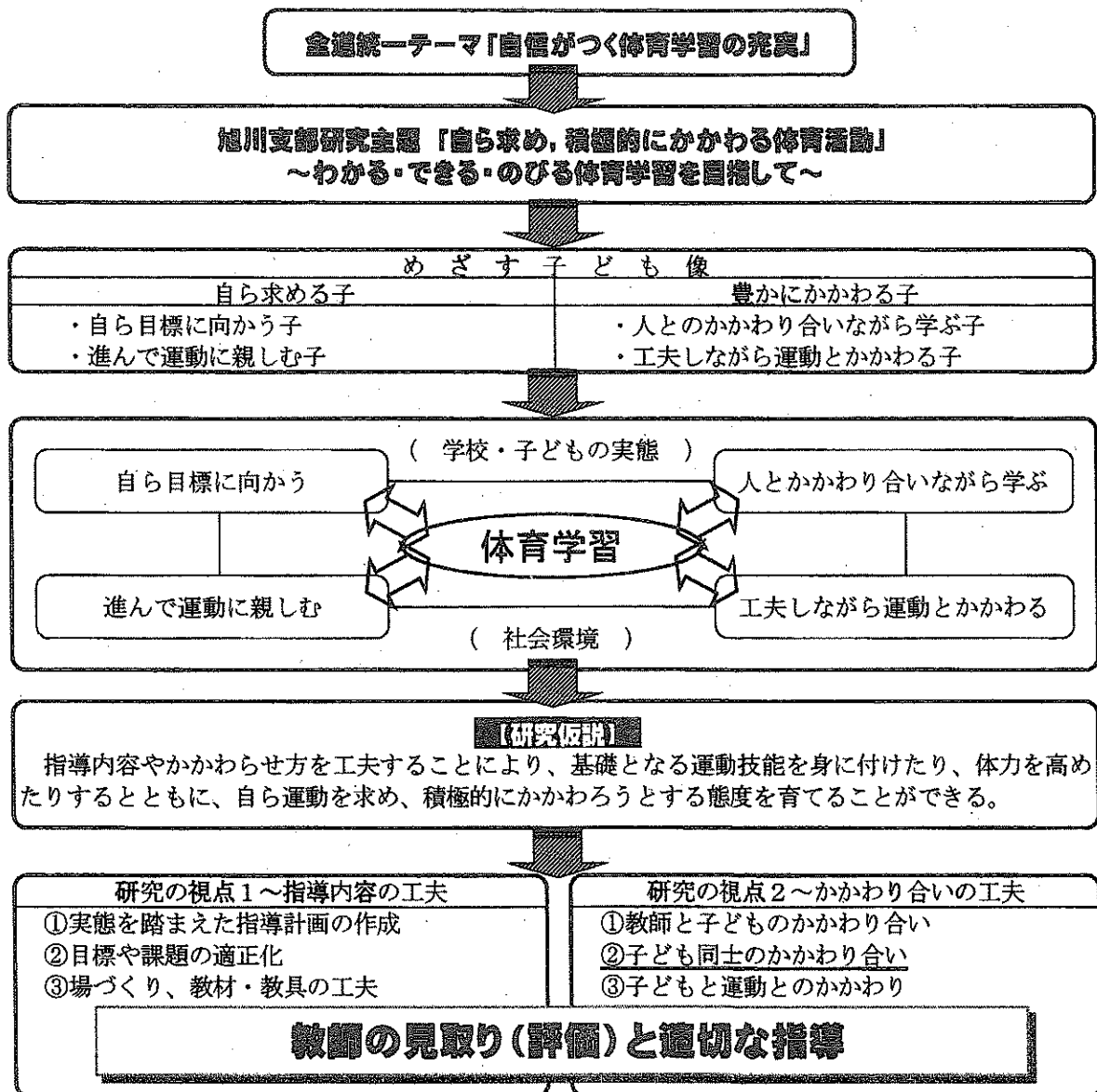
旭川支部 研究部長(中) 五十嵐 敬

1 旭川支部の研究について

2015年度より新研究構想・研究主題を設定し、3年間にわたって研究を進めてきた。昨年は北海道学校体育研究大会旭川大会に全道各地からたくさんの方々にご参会いただき、公開授業・研究協議を通して、旭川支部で特に重点としてきた「子ども同士のかかわり合い」について、多くの成果と課題を見出すことができた。

2018年度を迎えるにあたり、現研究についてはまだまだ十分とは言えず、より深く追究する必要があることから、今年度も同じ研究構想でよりよい授業づくりを目指していく。学習指導要領にもある通り、体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的な解決に向けた学習過程を位置づけることにより、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成できるよう、研究を進めていきたい。

2 旭川支部の研究構想



3 支部の研究と全道統一研究主題との関連

自信がつく

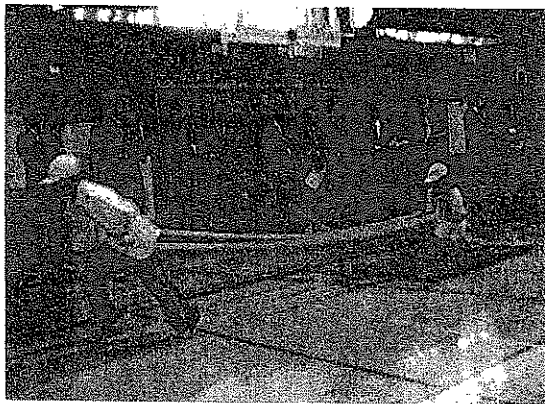
- ①わかる…「自分の運動課題を見付けることができた」(思考・判断)
- ②できる…「前よりも少しできるようになった」(技能)
- ③のびる…「自分は成長している、またやってみたい」(関心・意欲・態度)
- ①～③の3点を実感できたときに「自信がつく」と考え、これらを副主題やめざす授業像に反映させ、研究を行う。

体育学習の充実

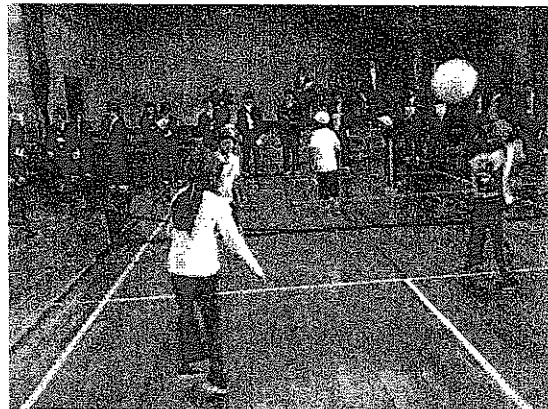
- ①学習過程……「人(仲間・教師)、もの(教材・教具)、こと(運動)」と積極的にかかわり、自分なりに工夫して運動に取り組ませることを目指す
→ 研究の視点1, 2
- ②指導と評価…特に教師のかかわり方(できている, 伸びていることを実感させる声かけ, 自己の運動課題を解決するためのポイントの提示, 意欲化を図る声かけ)の研究を行う
→ 研究の視点2
- ③教材の工夫…場, 運動方法, 教材・教具の工夫はもちろんのこと, 自分たちの課題に応じてルールをやさしくしたり難しくしたりして, 課題を解決できるようにすることを目指す
→ 研究の視点1, 2
- ①～③の3点について, 研究の視点1, 2に反映させ, 研究を行う。

5. 平成30年度旭川支部組織

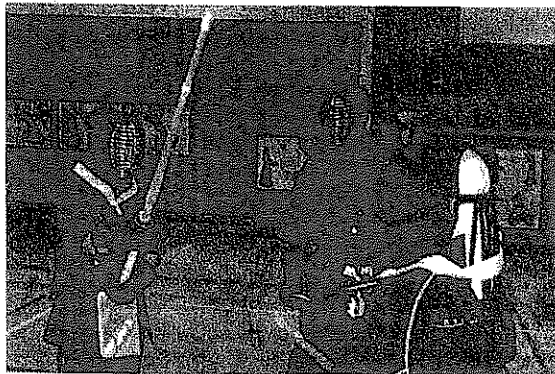
支部長	古高 誠志	(旭川市立近文小学校	校長)
副支部長	南向 信一	(旭川市立北門中学校	主幹教諭)
事務局長	畠山 順	(旭川市立陵雲小学校	教諭)
事務局次長	堀口 創平	(旭川市立愛宕中学校	教諭)
	成田 浩幸	(旭川市立愛宕小学校	教諭)
研究部長(小)	井上 真吉	(旭川市立神楽小学校	教諭)
研究部長(中)	五十嵐 敬	(旭川市立六合中学校	教諭)



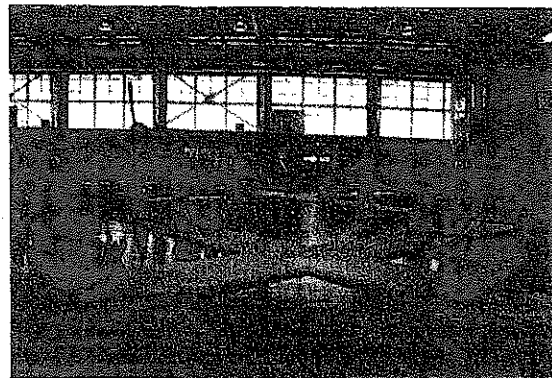
小学校第6学年 体づくり運動「体力を高める運動」



小学校第3学年 ゲーム(ネット型)「ブルボール」



中学校第1学年 武道「剣道」



中学校第3学年 器械運動「マット運動」

研究の成果と今後に向けて

【小学校：体力を高める運動】

(1) 研究の視点1『指導内容の工夫』

【成果】

- ・2年間の指導計画を立てることにより、身に付けさせたい力を見通した計画を立てることができた。また、1年次、2年次と動きの質や児童の運動に対する考え方の高まりが見られた。
- ・自己の体力の実態を知ること、必要感のある課題を見付けることができた。本時の振り返りと次時の課題を一体化して考えさせることで、見通しをもって活動することができていた。
- ・子ども同士が自然とかかわりをもてたり、運動の変化を子どもが見付けたりすることができる場を用意することで、自分の課題に合った運動をすることができていた。

【今後に向けて】

- ・何の根拠をもって、「自分の体力に合った」運動を選んでいるのかを考えさせていく。
- ・教師との対話、ペアとのかかわりから、自分の課題に合う運動を選ぶことができるようにする。
- ・目標、課題、まとめ、評価の一体化を図ることで児童も教師も見通しをもって学習活動に取り組むことができるようにしていく。

(2) 研究の視点2『かかわり合い』

【成果】

- ・前向きな言葉掛けを心掛けることにより、子どもがのびのびと運動に親しむことができた。子ども同士のかかわりの場を提示することでかかわりの活性化が見られた。
- ・ペア活動をする中で、課題解決のための声掛け、成長を実感する声掛けができていた。
- ・かかわりを意図した運動、動きの変化が付けられる運動、子どもにとって魅力のある運動を用意することで、運動の楽しさや運動する喜びを感じることができていた。

【今後に向けて】

- ・対話的な学びから、子ども自身が自分の課題に気付いたり、課題を解決するための見通しをもったりするようにしていく。場と場をつなぐ交流や運動のポイントを共有できるような意図的な交流の場を設定していく。
- ・運動を選択した根拠やその高まりを見取り、児童に返す評価の工夫をしていく。何をもって高まったのかを児童に実感させていく必要性、その方法について考えていく。

【小学校：プレルボール】

(1) 研究の視点1『指導内容の工夫』

【成果】

- ・今年度の運動が高学年のどの運動につながっていくかを見通して指導計画を立てることができた。ゲームを通して、基礎的な力をしっかりと身に付けさせることができた。
- ・チームの作戦→自分のめあてという流れが子どもにとってわかりやすかった。ゲーム1とゲーム2の間の作戦タイム（成果と課題の話し合い）をとることで技能の高まりも感じられた。
- ・実態にあった場やルール、教具（ボールやネットの高さ）を用意することで、児童が運動に親しむことができ、技能の高まりを感じさせることができた。

【今後に向けて】

- ・作戦、目標、課題、めあてなどといった言葉の整理（おさえ）が必要。チームの作戦と個々のめあてのつながりを考えていく必要がある。子どもの実態に応じた課題の整理が必要。
- ・技能の高まりが見られたら、ルールをさらに工夫（制限）することで新たな課題が生まれてくるなどといった技能とルールのバランスを考えていく必要がある。

(2) 研究の視点2『かかわり合い』

【成果】

- ・次に何をすべきかななどのマネジメント、個を大切に声掛けなどにより、児童が安心して楽しく運動に取り組むことができていた。
- ・これまでの学びを生かしたかかわり方ができていて、さらに声掛けの仕方などを指導するなど、発達段階に応じたかかわり方の基礎を身に付けさせることができた。
- ・プレルボールをアタックプレルという形に変えることでゲームの楽しさや難易度が高まり、子どもが夢中になって取り組むことができていた。

【今後に向けて】

- ・子どもの思考を整理させたり、深化させるための対話的、具体的な声掛けを意識していく。
- ・運動時間の確保のために、書く内容と話し合う内容の精査が必要。

【中学校：剣道】

(1) 研究の視点1『指導内容の工夫』

【成果】

- ・「気」「剣」「体」それぞれのポイントが、生徒にとってとらえやすい言葉で表現されており、正面打ちにおける自己の課題を理解して運動に取り組むことができていた。また、自己や仲間の技能の程度をとらえたり、アドバイスし合ったりするなどの土台をつくることに繋がっていた。
- ・正面打ちを3つの段階の練習に分けて生徒が選択できるようにしたことにより、自己の能力に応じて練習方法を選び、課題解決に迫ることができていた。

【今後に向けて】

- ・本時の学習では「改善ポイントを見つけること」「練習を工夫すること」が学習課題として挙げられていた。「技術向上のポイントを見つけること」に取り組んでいる生徒もおり、授業を通して身につけてほしいこと、考えてほしいことを焦点化する必要があった。目標や課題について、生徒の発達段階を十分に考慮して内容を精選していく必要がある。

(2) 研究の視点2『かかわり合い』

【成果】

- ・防具の着装、声出し対決、正面打ちの段階的練習など、あらゆる場面において複数の生徒がかかわり合いながら学習ができるようにすることで、生徒同士が自然に学び合いながら授業に取り組む姿勢が生まれていた。
- ・剣道の特性上、面の着装に時間がかかったり、練習中に互いの声が聞き取りにくかったりする中で、運動をする時間とかかわり合う時間のバランスをとることができていた。

【今後に向けて】

- ・iPadの活用は、自己の課題をとらえる手立てとして有効である。一方、かかわり合いを生み出すための手立てとしては効果的ではない側面もある。iPadを用いたかかわり合いを促す手立ての工夫については、より深い検証が必要である。
- ・課題把握の場、課題解決の場は設定されていたものの、目標に迫るための十分なかかわり合いとなっていたかについては課題が残った。剣道の授業における具体的な声かけ例の提示、互いにアドバイスをし合うための学習形態の工夫、運動量を確保しつつ生徒が深くかかわり合うための時間調整の仕方などについて、更に研究を進めていくことが大切である。

【中学校：マット運動】

(1) 研究の視点1『指導内容の工夫』

【成果】

- ・同調性というテーマと、それを構成する5つの項目をわかりやすく提示することにより、生徒が演技を見る上での視点を整理することができ、互いに見合ったり、声をかけ合ったりして動きをシンクロさせていく姿が見られるなど、積極的にかかわり合うための手立てとなっていた。
- ・タブレットを活用することにより、グループや個の演技を客観的に見たり、仲間のアドバイスと照らし合わせることで、自己の動きの改善につながるものとなっていた。広角レンズを使うことにより生徒が移動する範囲を狭くしていたことも、効率的・効果的な学習の手立てとなっていた。

【今後に向けて】

- ・思考判断の授業であることから、達成のための視点を提示することで生徒達は一生懸命に自己の運動について振り返ることができていたが、指導者の説明や生徒の記述に時間がかかり、十分な運動量を確保することができていなかった。単元を通して、自己の運動についての振り返りや、よりよい動きにするための考え方、記述の仕方についてしっかりと指導し、表現する力を身につける必要がある。

(2) 研究の視点2『かかわり合い』

【成果】

- ・できる技、できそうな技などの「自己に適した技」で演技を創作していったので、技能が高くない生徒でも目的意識をもって授業に取り組むことができていた。そのことが、本時のグループ練習の場面において、意欲的に練習をしたり、アドバイスを合ったりすることに繋がっていた。また、「同調性」という課題であるからこそ、その程度を高めるために深い学び合いができていた。
- ・みんなで「揃える」「演技を見る」「よりよくするために考える」など、グループ活動中心の学習形態にすることで、自然にかかわり合う風土ができていた。

【今後に向けて】

- ・同調性について考える上で、ほとんどの生徒は「タイミング」「姿勢」の2点を意識していた。「高さ(大きさ)」「スピード」「距離」についても考えさせられるような手立てを提示することで、生徒同士のかかわり合いはより深いものになったと考えられる。教材を生かし方、運動とのかかわらせ方について、よりよい方法を考えていくことが必要である。
- ・個人の課題をグループで共有する、グループ同士で演技を見合っって評価をするなど、1人のものを複数のものに、1グループのものを全体のものにと、考えや思いを広げていくような工夫が必要である。